

流動的生のダイナミクスと現象学的反省

和田 渡

フッサールが終始一貫して理性に依拠しつつ、超越論的哲学としての現象学の構築にその生涯を捧げたことは銘記すべきであるが、他方で彼が「ラディカルな経験論」の立場にたつて、人間の経験の諸相を執拗にかつ緻密に探究し続けたことも忘れてはならない。彼は自らが「驚異中の驚異」と呼んだ意識もしくは意識の生 (Bewusstseinsleben) に終生関心を持ち続け、自らに現われる意識の諸変様を丹念に記述し続けたのであり、その意味でフイנקが一九五九年にフッサールの構成的分析について述べた「凍った理性を持つて生き生きとした理性の源泉根拠に遡行する、意識という巨大な生体の解剖である」⁽¹⁾という指摘は極めて適確である。それどころか、フイנקのこの指摘は今後の現象学にとっても依然として有効な指針たりうるように思われる。⁽²⁾

そこで、本稿においては、フイנקの言う「意識の生体解剖」が繰り広げられている現場としての「発生的現象学」に視点を定め、そこにおいて展開されている「生の深層 (die Tiefe des Lebens)」に関する記述の意味を検討し、フッサールが反省的視線のメスに

よって開示したのは、それ自身が極めてダイナミックに機能する生の、言わば自己生成的次元であったことを明らかにしたい。この次元は反省によって開示されるがゆえに、生と反省を対置した場合に、ともすれば現象学における力点は反省の側に置かれ、したがってまた、ヘルト以来「生き生きした次元」⁽³⁾をめぐる現象学的反省の限界についても様々に論じられてきたが、以下では視点を變えて、反省によって開示される生が実は反省のみならず、理性的な諸作用をも可能にするところの、それゆえに反省によっては不十分にしか把握できない「根源的な次元」であることをまず強調したい。しかる後に、「生き生きとした流動的生」をそうした「根源的な次元」とみなした場合に、生と現象学的反省が発生的現象学においてどのように関係づけられるかを検討してみたい。そのために、まず第一に「自然」という概念に注目し、その概念が用いられている『イデーンII』を手がかりにし、次に『フッサリアーナ』第十一巻の「受動的総合的分析」を題材にしながら、フッサールが開示した生の深層次元の特色を明らかにし、それを踏まえて、生そのものの現象学

的反省の持つ意味とその射程を検討してみたい。

一

意識の生成と経過様態の本質記述を目指す発生的現象学の特徴が既に随所に認められる『イデーンⅡ』は、周知のように、物質的自然、心的自然、精神的自然の構成を主題化するものであるが、ここで特に問題にしたいのは、物質的自然と対置して「生き生きとした、魂（心）を持った自然 lebendige, animatische Natur」（IV, 27）と呼ばれているものである。この意味での自然は、とりわけ付録の第三節で強調される自我および自我の作用の「自然的側面」（IV, 338）、あるいは「全体的な自然の仕組み、自然のメカニズム（IV, 338）」「自然の傾向性」（IV, 339）、「心の自然的底層 der Naturuntergrund der Seele」（IV, 339）などと呼ばれているものと同義と考えられる。⁽⁵⁾ さらに補足すれば、ここで言われる「生き生きとした自然」は、『内的時間意識の現象学』の第三十五節で「一切の構成に先立って存在する絶対的意識」、第三十六節で「絶対的主観性としての時間構成の流れ」と呼ばれるものと同義であり、『イデーンⅠ』の第二章で言及される「体験流」もしくは「包括的な体験連関（die umfassenden Erlebniszusammenhänge）」（III, 75）、「厳密な学としての哲学」で「一つの絶対的な流れ」と呼ばれているものとも同義である。また一九二〇年代に成熟した形態をとる「発生的現象学」や三十年代に凝縮した展開をみた「生き生きとした現在」論などで繰

一〇

り返して言及される「根源的流動 das ursprüngliche Strömen」およびそれに類する概念とも共通した意味を持つと考えられる。⁽⁶⁾

このようにみれば、フッサールが一九〇〇年代から三十年代にかけて、一貫して自我と対象との志向的相関関係の問題を志向的構成の問題として探究する一方で、そうした自我の対象構成を可能にするような生の深層において生起している出来事を幾度となく主題化しようと試みていたことは明らかである。それというのも、成長して、覚醒した意識を持った自我が行なう対象構成はいきなり奇蹟のように始まるものではなく、その出現のために対象構成に先行する生の自己生成の歴史を必要としているからである。さらにまた、中断や再開が常態である自我の構成作用は、あらたな作用の開始に際して、より以前に行なわれた作用の現在からの後退のみならず後退した作用の現在への影響にも根本的に規定されているからである。したがって、言わば意識の表層で行なわれる構成作用は、自我が関与しなくともそれ自身で自己を構成している生の深層の出来事との係わりを考慮しなければ、十分には解明できないからである。

右に述べた始まり、中断、停止を伴う自我の作用が、そこにおいて可能になり、しかもそこには始まりも、中断も停止もないようなある究極の生の次元、それが、『イデーンⅡ』において、自我もしくは自我の作用の「自然的側面」と呼ばれるものである。この「自然的側面」においては、自由な自我、思惟し、意志する自我が関与しえないような仕方です「流れる」という唯一つの出来事が不斷に、それ自身のリズムで生起しており、この「自然的な流動」が自我の

作用を根本から支えているのである。たとえば、我々が一〇分後にいかなる作用を遂行するかを今正確に予見できないのは、生の深層における出来事が我々の予測しえない仕方で生起するからであり、そもそも作用が可能となるのも、作用の出現と後退を促すような出来事が作用に先行して間断なく生起しているからである。この出来事は心身が不可分に結びついた人間に特徴的であり、それゆえフッサールは生の深層の出来事を身体という「生き生きとした自然」とも関連づけて考察し、そこから感性的衝動、根源的感覚、触発といった問題を引き出してくる。⁽⁷⁾「生き生きとした自然」は、心身統一体としての人間において、能動的働きを遂行する自我の出現を可能にするような意識流の自己生成の場とみなされているのである。その深層の出来事を、フッサールは「能動的な受動性 (eine aktive Passivität) (IV, 337)」という両義的な言い方で示し、「自我から出発する能動性 (eine vom Ich ausgehende Aktivität) (IV, 337)」と区別しているが、そこで意図されているのは、能動的な志向的構成を遂行する自我の生の根底に、自我を基準にすれば受動的という他はないが、自我を基準としなければ能動的と言うのがふさわしいような深層の次元が不断に自己を形成しているということである。では、そうした「能動的な受動性」が特徴的な生の場面とは一体いかなる事態として捉えられるのか。この問題は、「受動的総合の分析」において、いわば生の表層から深層へ、さらにまた生の深層から表層への意識の経過現象の反省を通して入念に考察されている。そこで次に、「生き生きとした自然」の層が発生的現象学のなかでどの

ように把握されているかを検討してみたい。

二

受動的総合という概念は、先に指摘した「能動的受動性」と同様に両義的であるが、実はこうした言い方の内に、フッサールの意図が明瞭に示されている。すなわち、発生的現象学の課題は、一方でその都度あらたに遂行された自我の能動的作用が、意志の及ばぬ仕方での深層へと沈下する様態（自我にとつての受動的プロセス）を、他方でその深層において生の流れがそれ自身で自らを構成する様態（意識流にとつての能動のプロセス）を、その都度刻々と変様する意識様態に即して記述することにある。その場合、記述する主体はあくまでも反省的自我であるが、主な記述の対象は自我の作用が過去把持的変様を経て生の「下層 (unter Stufe) (XI, 252)」へ後退していく様態であり、過去へと沈下したものがあらたな現在へと浮上する様態はそれとしては記述されえない。言うまでもなく、反省は既に生起した出来事の後からの確認作業でしかないからである。その意味で反省に限界があるにせよ、発生的現象学が自我の自己自身の生への反省的自己関係に依存することは言うまでもない。

そうした関係の徹底化を通じて、生の表層と深層の出来事の連関を意識の経過現象に即しつつ説明する点に、発生的現象学の根本的特徴が認められるが、その連関は既に『イデーンI』の特に第三十五節から第三十六節にかけて、顕在性と非顕在性の相互連関の問題

として断片的に論じられている。「もろもろのコギタチオの連続的に進行する連鎖は、たえず非顕在性の媒質 (Medium) によって取り囲まれていて、この非顕在性は常に顕在性の様態へと移行する用意を整えており、同様にまた逆に顕在性も非顕在性へと移行する用意を整えている。」(III, 79) こうした表現によって、意識体験における過去と現在との間の相互影響性が指摘されているが、発生的現象学においては、この両者の関係が「作用体験 Akterlebnisse」(XI, 322) と「背景の体験 Hintergrunderlebnisse」(XI, 322) の発生的連関の問題として主題化される。その関連を記述するに際して、フッサールは「イデーニー」において断片的に用いている「連合」、「再生 (Reproduktion)」などの概念などに加えて、「類似性に従った連合」(XI, 407) としての「共鳴 (Resonanz)」(XI, 406f)、「沈黙 (Niederschlag)」(XI, 407)、「融解 (Verschmelzung)」(XI, 406f)、「喚起 Weckung」などの概念を多用している。注意すべきはこれらの諸概念が「根源的時間意識の総合」(XI, 125)、「すなわち自我の関与がなくともそれ自身で経過する意識の自己構成の位相を示すために採用されているということである。根源的時間意識の総合のレベルにおいては、意識と意識の結びつきは、意識自身の発生的法則に基づいて生起するのであり、身体的生理現象の多くがそうであるように、意識の発生的連合も自我の意志を超えた、生き生きとした「根源的現象 (Urphänomene)」(Vgl. XI, §29) あるはこう言うてよければ、そこにおいて「生き生きとした自然」が自らを自在に繰り広げる場なのである。意識と意識との間の共鳴、融解という現象も、意識が

生の深部へと沈黙し、再度浮上するのも、自我がその秘密を知りえない意識の不可思議な働きによるものである。

根源的な時間意識の流動的な出来事とは、こうした意識の神秘的な振る舞いが自己生成している状況のことに他ならない。そこでは意識が自在に現在と過去を行き交い、自我の作用のいわば残響を受容しながらその都度自らを変容させ、さらにまた自我の作用にあらたな促しを与えつつ自ら変容することを止めないのであり、このプロセスは実に謎めいた出来事と言うべきものである。こうして、発生的現象学の最大の特徴の一つは、意識的存在としての人間の生が、まさに一つの奇蹟であることを如実に示している点にある。そのことは次の文章からも明らかである。「そこにおいて一つの自然が絶えず構成される意識流は、驚くべき内的な有機的機構 (eine wunderbare Organisation) を持っている。」(XI, 215) その機構においては、「最初の、湧出的な超越 das erste, urquellenmassige Transzendente」(XI, 204) を不断の源泉として、流れる出来事の内で名状し難い有機化現象が生起している。とはいえ、そのことを反省的に確認することはできても、意識の表層と深層が瞬時にして交錯し合う自体をそれとして記述するだけの言葉が十分にわれわれに与えられているわけではない。それゆえ、フッサールは流れる出来事の経過様態の本質構造を明示する言葉を用いるにとどめている。その代表的な例が、頻繁に用いられている「相互浸透的に ineinander」と「共存的に miteinander」という言い方である。両者は、意識流において生起する一切の意識現象が相互に影響しあう事

態を指しており、それらの言い方によって、先に述べた「共鳴」「融解」といった現象が生起する状態が暗示されていると言うことができる。あるいは、「相互浸透」に類する「交錯 Verflechtung」という概念によっても類似の様態が示唆されている。「生き生きとした現在」において生起する一切は、まさに根源的な意識流の相互浸透の出来事として可能になるのである。その比類ない特徴を持った流れが不断に生起するがゆえに、自我の作用は過去把持的変様を経て過去へと沈下し、自我の生の深層に沈澱するだけでなく、過去への沈下・変容の過程は同時にまた過去からより新たな現在へ浮上しつつ、新たな現在の出現に影響を及ぼし続けるわけである。したがって、生き生きと流れる現在とは、その流れの内で不断に現在から後退する過去が過去全体に影響を及ぼすだけでなく、そのようにして影響を蒙る過去が同時に現在に影響を及ぼし続けるのであり、その意味で、その都度の現在はまさにフッサールが言うように現在と過去の「相互浸透的」経過であり、換言すれば、現在は過去と共存 (koexistieren) しつつ生成し続けるのである。とすれば、フッサールが意識流の「全体的プロセス (Gesamtprozess B)」(XI, 169) の源泉に位置づけている「根源的印象」、沈澱、変様が始まる以前の「根源的受動性 [Urpassivität]」⁽⁹⁾といえども、それはまったく新奇なものの出現というのではなく、過去化したものの影響下にあり、まさに「未知性は既知性の状態なのである」⁽⁹⁾。あるいは、後期の「自我がすでに最初の一瞥において事物を経験することができるのは、本質的発生によるものである」(I, 112) という表現も、現在と過去の

相互浸透性、もしくは共存性の認識に裏づけされている。その都度の自我の現在の経験には過去化した経験が絶えず瞬時に反響 (Resonanz) するのであり、それゆえに、根源的意識流は諸位相の相互外在的な (auseinander) 連関ではなく、諸位相の相互浸透的、共存的な生成連関なのである。

こうした意識と意識が奇蹟的な仕方では結合する「相互浸透」という事態を、「あらゆる自我の能動性の恒常的な底層 (Beständiger Untergrund aller Ichaktivität)」(XI, 256) とみなし、能動的自我との対比の下で「受動的な経験のプロセス」(XI, 252) として捉える点に発生的現象学の特徴がある。それが反省的的自我による生の深層解明として繰り広げられる以上、能動的自我が己れの根底に受動的層を見いだしていくという構図は避けがたいのが当然であるかもしれない。とはいえ、発生的現象学の豊饒な成果を強調するためには、ともすれば自我優先的観点からなされる記述のなかに垣間見られる、受動的発生という根源的現象の内側に主体を想定する観点を際立たせることも許されるであろう。以下ではその方向で、つまり、「受動的総合」という場合に「総合」の側に力点を置きつつ考察を進めてみたい。既に指摘したように、能動的自我を優先する観点からすれば生の底層の流れはどこまでも「受動的」とみなされうる。とはいえ、経験のあらゆる局面を貫通している意識と意識が瞬時に交錯する相互浸透をそれとして捉えるならば、その場面に関与しているのは自我ではないことを認めなければならない。自我は意識が己れの流れの内で他の意識と反響し合い、交錯し、かつ共存すると

いう相互浸透的で自己総合的な生成の局面で、その生成に促されながら自らを能動的に展開するにすぎない。この局面において自我は脇役にすぎないのである。

とすれば、そうした相互浸透という驚くべき事態を永続的に可能にしているのは一体何であろうか。そこで考えられるのは、「イデーⅡ」で指摘されていた「生き生きとした自然」という意識に内在する力である。意識という一つの生命的自然がダイナミックに自らを展開するプロセスそのものの内で、意識自身が自ら繰り広げる不可思議な現象、それこそがまさしく自我の反省的観点に即して「相互浸透」と呼ばれるものにすぎないのである。意識という「生き生きとした自然」の主体が繰り広げるこの「相互浸透」という事態は、自我の水平的レベルにおける知覚経験から、垂直的レベルにおける過去把持、再現、想起といった内的経験のすべての位相に隈無く行き渡り、意識はその根源的な運動を通じて、いわば無限に人間の外部と内部にひらかれた空間を絶えず時間化しつつ、自らの歴史を形成しつつある。この根源的流れは、自我が諸作用を遂行する間も、その作用と作用との間を連続的に結びつける自己総合的な流れとして生起し、自我が眠りの状態にある間も不斷に流れ続けている。この流れが形成する歴史は自我の覚醒のはるか以前に始まり、それゆえ自我はその過去の起源を知りえず、その歴史の未来についても、自我は自らがその主体たりえないためにその予測を拒否される。このことは、我々の精神の病とか、予測もしなかった未来の到来とか、最終的には不意打ちとしての死などによっても確認されるが、いず

一四

れにしても、発生的現象学が開示している世界は自我の超越論的反省以前に始まり、またその不可思議なまでの生成様態のゆえに、反省によつては決して十全には把握できない生き生きとした意識の根源的現象であることは確かである。この点はいくら強調してもし過ぎることはないであろう。

とはいえ、フッサールが現象学的反省の限界を自覚しつつも、決して超越論的反省の立場を最後まで放棄することなく、それを一九三〇年代の「生き生きとした現在」論に結実させた事実を忘れることはできない。とすれば、反省不可能な位相を含む流動的生のダイナミクスと現象学的反省の問題はフッサールにおいて一体どのような関係していたと考えるべきであろうか。次にこの問題を検討してみたい。

三

前述したように、とりわけ発生的現象学的反省によつて開示されたのは、いわば反省の故郷としての、反省がそこから生じてきたところの「根源の流れ」であり、その流れが反省作用の出現を用意するものだというところである。反省のみならず、自我のその他の志向的構成の働きも、つまるところ、生き生きと有機的に自らを形成する「根源的な時間意識の自己時間化」の流れにおいて現れて、再びその流れの内で姿を消す束の間の出来事にすぎない。フッサールの現象学的反省の最大の功績の一つは、まさに反省の努力によつて、

生の深層と表層の相互浸透的出来事としての生成の次元が容易には反省化しえない特徴を含むものであることを明らかにしている点にあると思われる。そのことは彼の思索の歩みのなかで決して主題化されたとは言えないにしても、『内的時間意識の現象学』から後年にいたるまで、「根源の流れ」に関する現象学的反省の限界の問題として折りに触れて言及されている。その点はたとえば、「永遠の流れ」(X. 295)「永遠のヘラクレイトスの流れ」(I. 86, X. 345, V. 181)といった表現や、次のような表現からも明らかである。「わたしに固有で本質的な存在の地平を解明する際に、最初に出会われるのは、わたしの内在的時間性と、開放的に無限な体験の流れという形式をもち・中略・あらゆる固有性をそなえているわたしの存在なのである。」(I. 132) こうした「永遠の」「無限な」といった形容詞によって、そもそも反省によって汲み尽くすことなど不可能な「無限性の次元」が存在するということが暗示されているのである。しかも、現象学的反省の限界に関して様々に論じられてきた点を踏まえるまでもなく、反省が過去化しつつある、もしくは過去化した出来事の事後確認の作業である以上、現になされつつある反省を含めて、あらゆる生き生きとした出来事の局面が反省の眼差しを免れることは自明である。その事は反省の天才にとって当然明瞭に自覚されてもいた。したがって、彼の主要な関心は現象学的反省の限界といった、ある意味では自明な問題について考察するよりも、むしろその限界を自覚しつつも現象学的反省を限界にまで推しめることの方にあつたと考えるべきであろう。実際にフッサールの歩み

を辿る時に明らかになるのは、発生的現象学において特に自我の生の深層に向けられていた反省が、次第により明確に生の極としての自我の生成の位相にまで向けられ、最終的にその両側面に向けられた反省が「生き生きとした現在」において、相互浸透的に機能する生の生成の場面の主題化として結実したということである。その執念の軌跡を辿るならば、それ自身がダイナミックに展開している流動的生は、限界まで歩みぬく反省の究極のテロスであつたと言つても過言ではない。フッサールは意識の流れの諸相への反省という忍耐を要する作業に専心しつつ、ひたすら自己の生を追い求めたのであり、その歩みにおいて、反省の光が意識の深層の「究極の深み」を照射する度合いが強まれば強まるだけ、それだけ一層意識の闇が深まりを増してくるという反省の体験を彼は文字通り生きぬくことになった。そして、そうした種類の反省がとりわけ入念に、意識の生体の深層分析として繰り返されている点に発生的現象学の特徴があると言ふことができる。しかも、「驚異中の驚異」と呼ばれる意識の自己構成的で極めてダイナミックな働きの主題化において、その特徴がいかなく発揮されているのである。

以上で発生的現象学における「意識の生体分析」が、反省に際限のない労苦を課す生の深層次元を開示している点を照射した。しかし、フッサールの意識分析は自己の内部へと垂直的に遡行する反省的自我の現象学的自己記述において卓越しているばかりではなく、特に知覚を中心として水平的な方向で機能する自我の能動的働きを

自我の自己時間化の運動のなかで詳細に記述している点にその真骨頂がある。発生的現象学に続く思索においては、そうした記述が執拗に繰り広げられており、フッサール現象学における意識分析の意義を確認するためには、稿を改めてその点を検討しなければならぬ。

注

- (1) 「フッサリアーナ」からの引用は、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で本文中に挿入する。
- (2) Eugen Fink, *Nähe und Distanz*, Alber 1986, S. 219.
- (3) 「理性による理性の源泉根拠への適行」というフィנקの指摘を、精神分析的な意味での無意識の分析と結びつけることも可能であろう。P. リクルの『フロイトを読む』を嚆矢とする現象学と精神分析学との比較考察的研究として、最近のものとしては例えば次のものがある。A. L. Mishara, Husserl and Freud: Time, memory and the unconscious, *Husserl Studies* 7, 1990, 29-58.
- (4) 現象学的反省の限界について論ずる研究者は、本文で触れたヘルトを始めとして、ラントグレーベ、M・ゾンマーなど枚挙にいとまがない。過去への内向を宿命とする反省が、反省作用そのものの現在をとり逃してしまう事情については、とりわけ次の書に詳しい考察がある。Klaus Held, *Lebendige Gegenwart*, Den Haag, 1966.
- (5) フッサール現象学における質料的自然の概念を主題化した優れた研究書として次のものがある。Bernhard Rang, *Husserls Phänomenologie der materiellen*

- (6) *len Natur*, Frankfurt am Main, 1990
- (7) ここで述べた意味での自然概念に注目した論文として次のものがある。Ludwig Landgrebe, *Problem der passiven Konstitution*, *Tridtschrijf voor Filosofie* 36, 1974, 466-482. 筆者はこの論文から多くの示唆を得た。
- (8) フッサールの「生き生きとした現在」については、拙稿「フッサールの生ける現在論」(『哲学論究』第七号、同志社哲学会、一九八七年)で論じたことがある。
- (9) フッサールの現象学が主にモノローグ的反省のレベルでなされているとしても、反省の対象である知覚、想起、世界経験、判断、生活世界等々は身体の問題を抜きにしては語ることができず、それゆえ「生き生きとした現在」を「生き生きとした身体」の問題と関連づけて考察することが筆者に課せられた課題である。
- (10) これらの概念のいくつかについては、拙稿「フッサール現象学における発生と連合の問題―志向的主観に関する理論への一視点」(『同志社哲学年報』第五号、一九八二年)で論じたことがある。
- (11) Edmund Husserl, *Erklärung und Urteil*, Hamburg, 1954, S. 34.
- (12) 今後の課題としては、本稿の内容との関連で言えば、たとえば相互浸透の現象を身体を媒介とする身体内部と身体外部の相互的交流の場にまで拡張して考え、意識と世界が相互に呼応し合い、両者は生成において一つであるといった「意識生成」論を「生き生きとした現在」論の延長線上に構想することも可能であろう。また生の深層におけるダイナミズムの源泉を、フッサールが言及していた「衝動(Trieb)」と結びつけて考えれば、最近のリー(Nam-In Lee, *Die Phänomenologie der Instinkte*, Dordrecht 1993.)の

研究に代表されるような、衝動という概念を中軸に据えた現象学の展開も可能になると思われる。さらにまた、相互浸透の現象を自我の志向的総合の働きそのもの内に見いだしていくとすれば、従来とはまったく異なる自我概念が要請されることになるであろう。こうした問題の考察は、反省的意識に現象しない次元を主題化するために、現象学的研究の枠内に収まるかどうかは疑問であるが、探究されるべき課題である。

〈付記〉

本稿は、一九九三年九月十二日に *Societas Philosophiae Doshisha*（於同志社大学）で行なった口頭発表に加筆、修正を加えたものである。

（一九九三年十二月十七日受理）